中国の児童生徒における学級の目標構造および親の養育態度が自己調整学習に及ぼす影響
――小中高校の学校差に着目して――

耿　　一　婧

１．はじめに

これまでの研究では，学級と親を独立変数とし，自己調整学習方略を従属変数とする因果モデルを用いた研究が多いが，親と学級の両方の要因が考慮されている研究は多くない。家庭と学校は，子どもの学習行動に影響を与える「重なり合う領域」として特徴付けられてきた（Ames et al., 1995）。一方，中国では，子どもの教育と親孝行は深く関連しており，子どもの学業達成は，親孝行の一部として社会価値に重視されているため，中国における親の影響力は欧米国より大きい可能性も考えられる。

２．方法

中国河北省の小学生164名，中学生197名，高校生142名の計503名（男性250名，女性215名，不明38名）を対象に質問紙調査を行なった。質問紙は，フェイスシート，自己効力感尺度，自己調整学習方略尺度，学級の目標構造尺度，親の養育態度尺度，客観成績の自己評価，各科目の重要度，テスト不安尺度と学業的コンピテンス尺度で構成されたものであった。

３．結果と考察

学級の目標構造と親の養育態度が児童生徒の自己調整学習方略の使用にどのような影響を及ぼすのかを検討するため，小中高2要因分散分析を行った。その結果，まず，リハーサル方略と精緻化方略については，主に小学生の交互作用が認められた。学業達成を強調する遂行接近目標の学級において，児童生徒は親の要求性が高いと，リハーサル方略と精緻化方略を多く用いることが示唆された。次に，援助要請では，中学と高校について異なる交互作用がみられた。中学生では，遂行接近目標が高い学級において，親の反応性が高い場合には生徒の援助要請が高まった。一方，高校生では，遂行接近目標が低い学級において，親の反応性が高い場合には生徒の援助要請が高まった。中学生は親と教師の期待や指示に影響されやすい年齢段階にあるが，高校生は精神的自立が始まり，学業成績をひたすら追い求める学校環境に反抗し，自分で判断・選択できるゆとりある環境では援助を求める意欲が高まることが考えられる。テスト不安では，中学生のみ交互作用がみられた。親の反応性が低い場合，熟達目標構造と遂行目標構造のいずれかが高い学級においても，生徒のテスト不安水準が高かった。本研究によって，中国における学級の目標構造と親の養育態度が相互に児童生徒の自己調整学習方略と学業達成に影響を及ぼす点は新たに見出された。